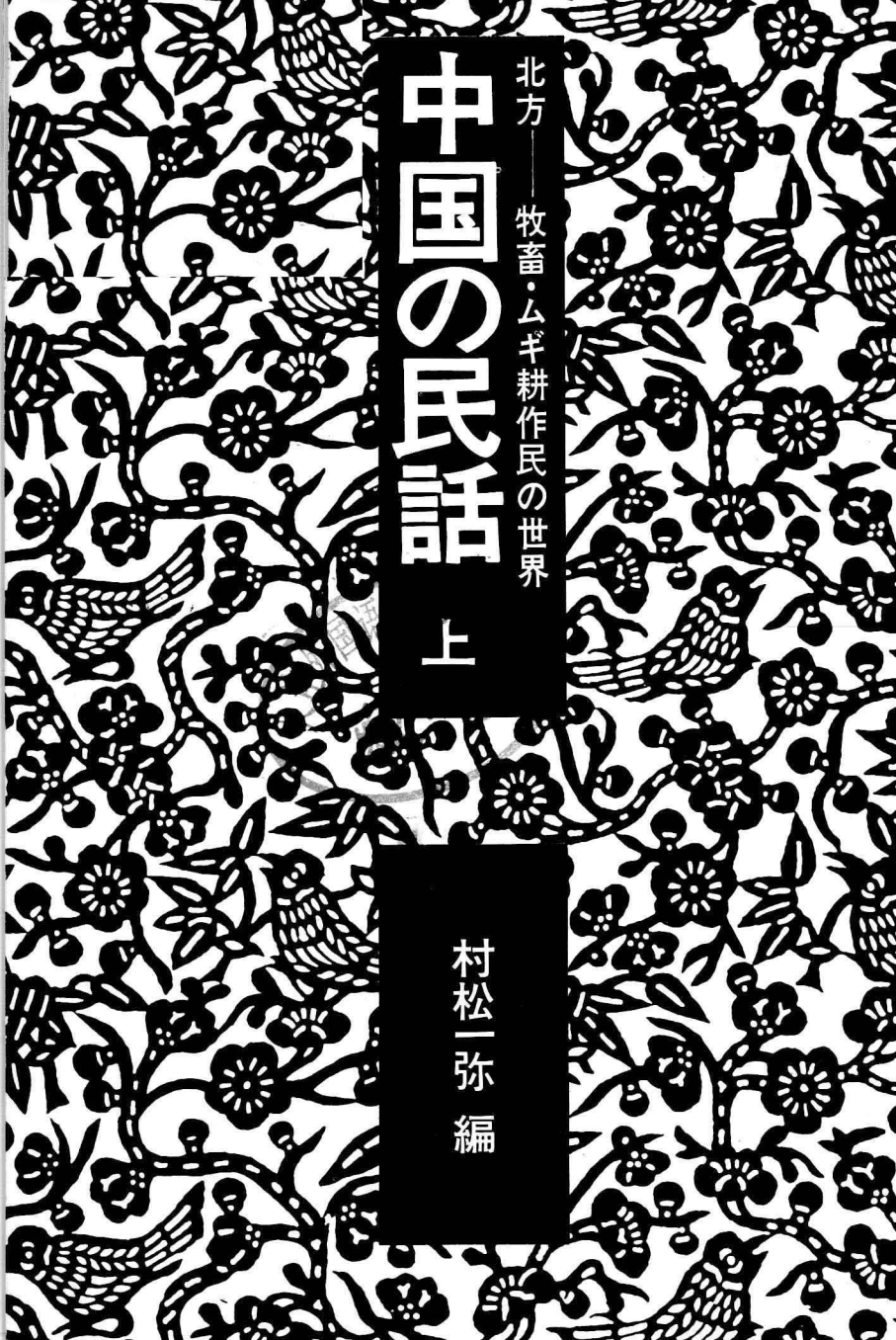


北方——牧畜・ムギ耕作民の世界

中国の民話

上

村松一弥 編



北方——牧畜・ムギ耕作民の世界

中国の民話

上

村松一弥 編

編者略歴

村松一弥 (むらまつ かずや) 1926年
(大正15年)東京生まれ。1957年東京都立大学
文学修士、現在同大学人文学部助教授。専攻
中国民間文学・芸能。著書・訳書「中国少数
民族文学集」(平凡社)、「清俗紀聞」(平凡
社)、「中国の音楽」(勁草書房)
住所 埼玉県鳩ヶ谷市西公団住宅5の6

訳者

中国民間文学研究会翻訳グループ——
大石智良、加藤千代、木川洋子、黄 成武、
繁原 央、志村三喜子、鈴木健之、瀬田充子、
中島貞子、西脇隆夫、牧田英二、宮治利子、
村松一弥

中国の民話 (上)

北方——牧畜・ムギ耕作民の世界

¥ 700

昭和47年11月10日 印刷

昭和47年11月20日 発行

編 者	村 松 一 弥
編集人	西 川 雅 敏
発行人	朝 居 正 彦

発行所 毎 日 新 聞 社

東京都千代田区一ツ橋・郵便番号100
大阪市北区堂島上・郵便番号530
北九州市小倉区紺屋町・郵便番号802
名古屋市市中村堀内町・郵便番号450

© 1972 Kazuya Muramatsu

印刷・凸版印刷・製本・大口製本

0098—500154—7904

まえがき

中国という広大な天地は、西方が高く、東方には大平原が開け、黄河と長江（揚子江）の二つの大河が流れている。その中間に淮河という川があり、ほぼこれを境にして、中国は北部と南部とに大別することができる。北部は黄土の堆積する大平原と、興安嶺の森林および蒙古高原からアムド、カム、そしてチベットへと続く広大な高原と、シルクロードぞいのタクラマカン砂漠、タリム盆地をも含めて、いわゆる乾燥アジアの世界に属し、そうした風土に適したムギの栽培と馬や羊の牧畜にこそしむ、牧畜・ムギ耕作民の天地である。南部は長江と珠江流域およびインドシナ半島にそそぐ紅河、メコン川、サルウィン川の上流など、湿潤アジアの世界に属する、水稻耕作民の天地である。南部と北部とはそれぞれ異なった文化と人間を育てながら、またひとつの大陸に生きるものとして、互いに対立と交流とをくりかえしながら、中国文化という、古くて新しい、たえず異質の新鮮な血をとり入れてきた、包容力の大きな文化の流れを形成してきたのである。

したがって、本書では、中国文化を形成する諸民族の民話を、I 北方——牧畜・ムギ耕作

民の世界と、Ⅱ 南方——水稻耕作民の世界との上、下二部にわけて紹介し、漢民族の民話だけでなく、漢民族の文学を豊かに発展させる上で無視することのできぬ役割を果たしてきた、素朴で、生命力に満ちた少数民族の民話にもひろく目をくばり、全体的、総合的に中国の民話の世界をとらえられるように配慮した。

また同じ東アジア世界に属し、古くから文化交流関係がある中国と日本の民話は、互いに親近性を示すものが少なくないが、しかし、それぞれの風土と歴史のちがいというものも忠実に反映しており、中国人とはなにか、日本人とはなにか、を考える上でも有力な手がかりになる。そこで本書では、各編のあとに典故および関連する日・中の民話の型についてふれるだけでなく、各編の背景となる各民族の特色や生活慣習についての解説もできるかぎり加えておいた。

中国民話は、ながいその歴史を通し、多くの中国民衆の生活から生み出された生きものである。流動性に富んでいて、聞き手や語り手や、土地や生活のちがいで話が変わっていく。しかも、つねになんらかの形で民衆の現実とつながりをもち、ある時代、ある土地の現実に根ざしながら、つねにそれをのりこえて、よりよい生活を築こうとする姿勢で、自分たちの生活と、自分たちのねがいを語っているのである。そのことを、できるだけ実感をもってつかみとれるような本にしたいと努力した。

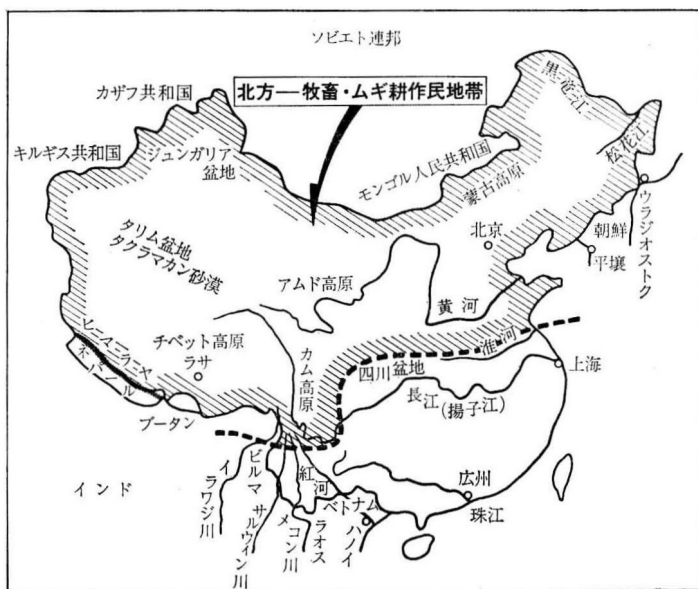
一九七二年十月

村松 一弥

中国の民話(上)

北方——牧畜・ムギ耕作民の世界

目次



まえがき

漢族（北方）

ナツメのたね太郎

〈一寸法師型の話〉

10

ウシ飼いと織姫

〈たなばたの話〉

14

孟姜女のはなし

〈長城を涙で崩した女〉

30

二郎の太陽退治

〈太陽を射る話〉

41

働きものの次郎

〈花咲翁型の話〉

45

秦の始皇帝と十人兄弟

〈力太郎型の話〉

55

魯班の大工修行

〈大工の名人の話〉

58

淵あにいのむほん

〈捻軍の話〉

72

うおつり童子

〈義和団の話〉

84

劉栓の子ウシ

〈義和団の話〉

94

ツングース系諸族

プーメイ

〈難題むこ型の話〉

― オロチョン族 ―

104

月にのぼった女房

〈月に住む水汲み女の話〉

― ホジェン族 ―

119

六人兄弟

〈力太郎型の話〉

― 朝鮮族 ―

124

モンゴル族

馬頭琴

〈ヒツジ飼いと白馬の話〉

134

パリンの関取

〈蒙古相撲の話〉

139

ウイグル族・回族

アイシャー・シャン王子の謎とき

〈三人兄弟型の話〉 ― ウイグル族 ―

148

木陰を買った話

〈頓智話〉

― ウイグル族 ―

161

賢い女房

〈絵姿女房型の話〉

― ウイグル族 ―

163

エベンディーばなし

〈ウイグルの頓智男〉

― ウイグル族 ―

181

白ウサギのアイーサ

〈ウサギ女房の話〉

― 回族 ―

185

チベット・イ系諸族

塩茶のものがたり

〈草原のロミオとジュリエット〉 ― チベット族 ―

200

ドンパおじばなし

〈チベットの頓智男〉 ― チベット族 ―

215

ミカン姫

〈瓜子姫型の話〉 ― チベット族 ―

222

よっぱらいスズメ

〈動物笑話〉 ― チベット族 ―

240

奴隷^{どれい}の娘 ヨンシー

〈チベットのシンデレラ〉 ― チベット族 ―

243

アイダンばなし

〈ナシ族の頓智男〉 ― ナシ族 ―

254

めおとの虹^{にじ}

〈相思鳥型の話〉 ― イ族 ―

260

イラクサとヨモギ

〈赤頭巾型の話〉 ― ベー族 ―

270

現代に生きる中国の民話

281

中国の民話 (上)

北方——牧畜・ムギ耕作民の世界

漢

族

(北方)



オンドルの上にすわり、村の相談ごとをしている漢族農民（陝西）

ナツメのたね太郎

八月十五夜、月はまんまる、まどいの夜も、びんぼうなじじばばだけは、さびしいもんだ。ひとりも子どもがなかったでノウ。

月見をしながら月餅^{ミツヒ}をたべていたばあさん、ふと、月餅のアンにはいつていた、ナツメのたねをとりだすと、じいさんに見せていった。

「アーア、せめてナア、このたねぐらいのせがれでもいいから、いたらノウ……」

そういったとたん、ナツメのたねは、ボンととんで地面におちると「かあちゃん」「とうちゃん」とさげんだ。そりゃあ、ほんに愛らしい声で。

じじばばが、たねをひろいあげてよく見ると、ヤレマア、手も、足も、目も、はなも、ちゃんとしている。ふたりはおおよろこび。なにしろ子どもをさずかったんだ。

このナツメのたね太郎、いつまでたってもおおきくならず、いちんちじゅう、ボンボンとげんきよくはねまわって、なんともかわいかった。

ある日、県の役所の下役人が、かどぐちを通りかかった。両手に酒どっくりをもっていた下役人、ここで用をたしたくなって、そいつをまどのふちに置いた。

酒どっくりを見たナツメのたね太郎、めずらしくてたまらない。ボンボンボンと、とっくりめ

ざしてはねてきたが、ついはずみをつけすぎた。とっくりを突きおとしてガチャン。

さあただごとではすまない。下役人は、太郎に、どうでも県知事さまのどこまでいってもらおう、という。

県知事が出てきて、まだ口をひらかぬうちに、ナツメのたね太郎は、役所のなかをボンボンとびはねながら、イヌちくしょうの、ヘボ役人ヤーイの、とあくたいをつく。

かつとなった知事は「こっちへこーい」ときけんだ。

ところが「こーい」と口をおおきくひらいたとたん、太郎はボンとひとはね、知事の口のなかにとびこんじまった。

口からノド、ノドからハラへとすべりこんだ太郎、ハラの中なかでなにをしたとおもう。ハラワタにぶらさがってブランコあそびさ。

知事はいたくてたまらないから、しきりにたすけてくれという。だが、太郎のほうはハラのかでうたをうたっている。

ブランコ　ブラリ

ブランコ　ブラリ

こぐぞ三千六百年

これをきいた知事、三千六百年どころか、ほんの一時いっときもがまんできないものだから、あわれな声で

「はやく出てきてくれ。すぐ出て来てくれたらほうびをやる」

太郎が「これからワイロをとらないか」というと

「とらぬ、とらぬ、ぜったいにとらぬ」

そのことばがおわらぬうちに、ナツメのたね太郎はボンと知事の口からとびだした。

とたんに知事は、前よりもすごいけんまくで「おしもおされぬ県知事さまを、ちびのくせにバカにするにもほどがあるわい。こっちへこーい」とさげんだ。

ところが「こーい」と口をおおきくひらいたとたん、太郎はまたもやボンとひとはね、知事の口のなかにとびこんだ。ハラのなかまですべりこんだ太郎、またうたいだした。

ブランコ　ブラリ

ブランコ　ブラリ

こんどは三万六千年

ぶったまげた県知事は、あわてて

「はやく出てきてくれ、はやく。こんどはなんでもいうことをきく」

「イヤイヤ、こんどはハラのなかで、おかみのさばきをやりなおさせろ」

しかたなく知事は、罪人たちをみんな牢屋からだして、さばきのやりなおしをはじめた。

知事が罪人に「無実の罪ではないか」とたずねると「はい」というへんじ。ハラの中かの太郎は「すぐさま釈放」とどなる。知事は「ごもっとも、ごもっとも」と釈放する。

知事が罪人に「おまえは文なしだったな」というと「はい」というへんじ（ワイロなど出せなくて牢に入れられていたのだ）。太郎は「すぐさま釈放」とどなる。知事は「ごもっとも、ごも

「とも」と釈放する。

こうして、つぎからつぎへと罪人はぜんぶ釈放。さいごに、知事が「牢屋はカラッポになりましたが」というと、太郎は「百姓をいじめるオニ地主どもをつかまえてこい」とどなる。知事が「ごもっとも、ごもっとも。これ下役人、おおいそぎでつれてまいれ」というと、下役人どもはすっとなでいった。

下役人たちが出かけると、ナツメのたね太郎は、ボンと知事の口からとびだした。

「こんどウソをついたら、おまえの歯をへし折るぞ」ときめつけると、太郎はボンボンとんで、じじばばのところへかえっていった。

こうしてかえってきた太郎が、じじばばはかわいくてたまらない。夜ねているあいだも、しきりにさすりつづけていた。

と、ふたりは、せがれのからだがりバリバリと音をたてているのにきづいて、あかりをつけてみた。なんと、ナツメのたねの皮がむけて、まるまる太った人間の坊やがあらわれたから、おおよろこび。じじばばは、こんどはグッスリねむった。

あくるあさ早く、とびおきてみると、ナツメのたね太郎はもうスラリとした若者の姿になっていた。

若者は寝ていたオンドルからサッと起きあがると、じつのせがれが親を呼ぶ口ぶりだ

「どうさん、かあさん」

と、じじばばに声をかける。

じじばばには、こんなりっぱなせがれができたというわけ。ヤレヤレ。

原題「棄核児」 劉思志が一九五三年十二月に山東半島のつけね、青島の東北にある嶗山の上臧村で採集したもの。「民間文学」一九六五年・第一期所収。

八月十五夜のような節供の晩に、月に供える月餅（ナツメヤクルミなどのあんを入れる）のような節供の食物から「ちいさ子」が生まれるという不思議なおこる。

日本の一寸法師のような、いわゆる「ちいさ子」の話である。西洋の小人とちがい、東洋の「ちいさ子」は最後に人間に成長する。日本の一寸法師はオニの腹の中に入るが、ナツメのたね太郎は県知事の腹の中に入る。これは、現実の生活を大事にして、現実の生活をしぶとく戦いぬいてきた、漢族貧農が生んだ「ちいさ子」なのだ。

七億といわれる中国の総人口の九四パーセントは、中国東部の大平原を主居住区とし、農業を主産業とする漢族が占めている。ふつう私たちが中国人とよんでいるのは、この漢族である。

ウシ飼いと織姫

むかし、ふたり兄弟がいて、兄貴は女房もちだったが、弟にはまだ女房がいなかった。弟は、朝はキビがゆをすすり、昼はキビめしを食べて、一日中働いていた。ところが、兄貴夫婦は、弟の留守の間にうまい物ばかり食べていた。

その日、弟はウシを使って畑を耕していたが、昼どきになって、ウシが声をかけたわい。

